地域の災害を考える　（３）　　昭和１３年９月　金目川、鈴川の氾濫被害

昭和１３年（１９３８）９月１日　台風は三浦半島三崎付近に上陸し、横浜の西、関東北部を通過しました。神奈川県西部の山間地に大量の雨を降らせ、諸河川の決壊が相次ぎました。

台風通過後も停滞した前線により大雨が降り、神奈川県内の被害は甚大なものとなりました。

◎　その状況を横浜貿易新報（現・神奈川新聞）の記事から平塚市、金田村近隣の記事を紹介します。

■　昭和１３年９月３日発行の紙面より

無慮百萬圓に達す
河川堤防の決潰續發し
濁水人家耕地を貫流

深さ一米の濁湖
四ケ村水浸し
耕地の被害前回より甚大

水田中を貫く諸川
川底が陸より高い
分水路の計畫一歩前

縣下暴風雨被害

死傷者十六名
全潰家屋六四八
其他損害豫想外に甚大

果實と蔬菜

下郡畜産組合
宮川技師留
軍用馬に關する不

ハマ市街路樹
損害五
全市青年

市營

1　深さ１米の濁湖　　四ヶ村水浸し　　耕地の被害前回より甚大　　＜見出し＞

金目・岡崎・金田・豊田の各村は、金目川の下大槻堤防が破損して一時土屋方面へ流れたが、再び本流へ逆流して南金目から左岸に決壊したる為、前記四村の大部分は、人家といわず耕地といわず濁流に浸った所へ、鈴川・大根・玉川の各河が数十ヶ所堤防破損した為、更に大根・岡崎の両村に広がって、三百町歩に亘って一米前後の水深で一大濁湖をつくっている。前回の水害には之が被害地九百数十町歩に及んでいたが、今度はこれ以上に及んでいる。

2　水田中を貫く諸川　　川底が陸より高い　　分水路の計画一歩前　　＜見出し＞

中郡金目村一帯は本件唯一の農耕地帯であるが、従来年々風水害の都度玉川の河底が高いため氾濫の場合には減水までには十日前後有していた。県農地課では之が災いを除くため、玉川の上愛甲恩曾川を経て相模川へ約一里の水路を作って分水すべく五、六十万円の予算で計画している。一方玉川の下流に当たる菅城沼島村長他数名も二日県耕地課に前記対策方を陳情した。一方金目川も玉川の二里に至る天井川同様川底が平地よりぐっと上がっているため川渫が必要とされている。

3　県下暴風雨被害　　＜見出し＞

風水害土木被害は愛甲、中郡もっとも甚だしく、全県下で道路、堤防の破損欠潰橋梁の流失その他等々で、県土木関係だけでその損害百万円を超えているため、町村その他では、二百数十万円に上る模様である。

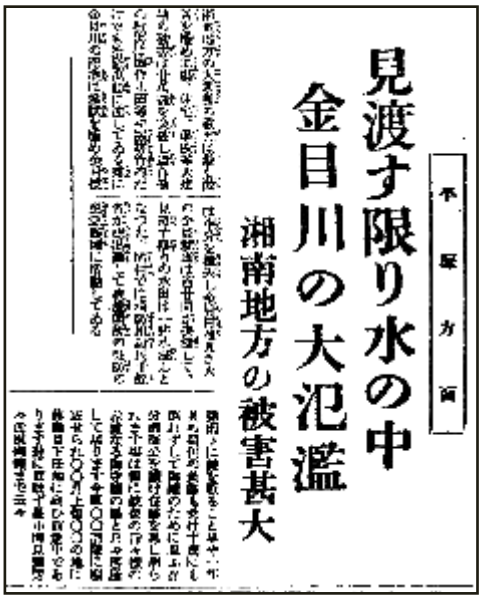
4　死傷者１６名　　全潰家屋６４８　　その他損害予想外に甚大　　＜見出し＞

県下における台風被害は予想外に甚大で、県警察電話の復旧、交通機器の回復等で逐次判明。二日午前中に県保安課に達した報告によると　▲死者５　▲負傷者１１　▲家屋全壊６４８　▲半壊２９５０　▲流失１１２　▲床上浸水１１６８　▲床下浸水５０９０　▲家屋被害計６９，９６８　▲堤防決潰７１ヵ所　延長３９６間　▲道路埋没１４ヵ所　延長１１５０間　▲橋梁流失２８　▲水田浸水３４８町８反分　▲埋没水田６０町歩　▲浸水８５町歩　▲流木６２１，５００円で未報告のものが尚相当残っているものと見られ被害総計は１，７００万円に達するものと見られている。

平塚地方

見渡す限り水の中　　金目川の大氾濫　　湘南地方の被害甚大　　＜見出し＞

湘南地方の大暴風雨の被害は最も激甚を極め、工場・住宅・学校等大建物の被害は二十万円を突破し、農作物の被害は畑作水田等、平塚署管内だけでも十数万円に達している。ことに金目川の氾濫は惨状を極め、金目橋は半分を流出し、金目村地先き大ママの金目県道は１２０間が損潰して、見渡す限りの水田は一面水浸しとなった。同村では、消防組織農民千余名が総出動して、欠潰箇所の堤防の応急修理に活動している


平塚方面
見渡す限り水の中
金目川の大氾濫
湘南地方の被害甚大

■　昭和１３年９月６日発行の紙面より

各河川再び増水して修理箇所またも決潰　　豪雨被害の総勘定（県保安課調査）

「９月２日夕刻より、ぶり返した豪雨で減水しかけた河川も又々増水、折角修理した個所を破損決壊する等被害は各所に増大し・・

平塚市外金目川堤防決潰修理のため、平塚署では朝来管内消防組旭村２００名、岡崎村６０名、豊田村４０名、大野村５０名計３５０名を動員、修理作業を行っている。・・」

■　昭和１３年９月７日発行の紙面より

金目川の濁流
減水を待つて作業續行

金目川の濁流　　減水を待って作業続行　　＜見出し＞

一日の豪雨で決壊した金目川の氾濫個所堰き止めに、連日六、七百名の農夫、消防夫出動しているが、五日の豪雨で又も四、五米増水したので、堰き止めた土嚢の上を濁流が溢れ中央の廿五米は水深二米となって水倉も土嚢も押し流され、方法がつかぬので減水を待って堰き止める作業を行うこととなった。

（写真は金目村の水倉による防水作業）

（注）（写真は金目村の**水倉**による防水作業）とありますが、水倉は「水害に備え一段高い所に設けられた生活必需品を備蓄する建物」です。写真のように川の中に建てることはありません。

作業の様子から、「カワクラ」のことと思われます。「カワクラ」とは、堤防の決壊を防ぐために、丸太を三角錐状に組み、底に土俵を積み上げ水の当たる所に枝付の木を縛り付け、決壊しそうな所に据え付けます。水流に流されないように土手に結びつけます。こうすることで川の流れが直接土手を洗うことを防ぐことができます。

堤防の決壊を防ぐには、「ナガシ」、「畳ぶすま」という方法も採られました。

■　昭和１３年９月９日発行の紙面より

金目川の復旧　　一日も早きを要す
沿岸町村長陳情　　＜見出し＞

丹沢を水源とする金目川は中郡内を貫流、今次の水害においても一番徹底的に破壊され、これが復旧までには容易でなく、八日地元県議関野三十郎、同関野進、宮田文一、三氏に伴われて高橋金田、小牧金目、中丸岡崎、後藤北秦野、若林土澤の各村長、石井秦野町長、山口南秦野村各助役が県土木部並びに各関係部課長を歴訪、口頭で一時も早く金目川流域の復旧工事を援助して欲しいと陳情して引揚げた。

金目川の復舊
一日も早きを要す
沿岸町村長陳情

丹澤を水源とする金目川は中郡内を貫流今次の水害においても一番徹底的に破壊されこれが復旧までには容易でなく八日地元県議関野三十郎、同関野進、宮田文一、三氏に伴はれて高橋金田、小牧金目、中丸岡崎、後藤北秦野、若林土澤の各村長、石井秦野町長、山口南秦野村各助役が県土木部並びに各関係部課長を歴訪口頭で一時も早く金目川流域の復旧工事を援助して欲しいと陳情して引揚げた。

◎　金目川の堤防修復の様子

（金田小学校創立 100 周年記念誌より）

昭和１３年の台風での　神奈中バス停　県立平塚養護学校前付近での作業の様子といわれています。この付近の金目川は通称「オオマガリ」と呼ばれ、その名の通り金目川が大きく曲がっています。写真は、流れが土手を削り取っています。決壊寸前のようでした。杭が打たれ土俵が積まれ、善後策が施されています。

◎　昭和１３年９月１日　「神奈川県災害史（自然災害)」（１９６５）より

昭和１３年（１９３８）８月３１日～９月１日　　風水害（台風）
金目、中津、小鮎、玉川等および鶴見多摩の諸河川氾濫する。
八丈島付近から北上、三浦半島をとおり、関東を縦断　秋田に抜けた台風による。

＜概　況＞

３１日の正午八丈島付近を通過する頃には中心気圧９６８ｍｂくらいに発達する。

１日の１時過ぎ、三浦半島の三崎付近に上陸し、２時過ぎには横浜の西を通過して関東北部を通り、衰弱しながら北北東に進み北海道に去った。

横浜の最大風速は１日０時４０分　３７．４ｍ（１９２８年以来)

最大瞬間風速は　４７．７ｍ（１９３８年～７０年までの第１位の強風記録)

台風が南方海上にあった２９日から、県内全般に雨が降り始め、台風の通過した２日から３日にかけても前線が停滞し、雷雨性の強い雨が降った。２９日から３日までの横浜における総降水量は２４０ｍｍとなり、県内各地で大雨による被害が出た。

＜県内の状況＞

台風通過の東側に当たった県東部では、強風による被害が続出し、横浜市内の街路樹は殆んど全部吹き倒され、看板・屋根など吹き飛ばされたところが多かった。県内各地で家屋の倒壊が起こり、電話線の切断、電柱の倒壊により通信は全く不通となり、交通は途絶し、電灯も５日になってやっと復旧した。

大雨による被害も続出した。２９日から１日までの総雨量は平野部で２００～４００ｍｍ、西部の山間部で４００～８００ｍｍの多きに達した。このため各河川とも既往の警戒水位を突破して新記録を作り堤防は至る所で越水、決壊し県内の冠水地域は３０ｋ㎡を越えた。

台風通過後の２日未明に関東地方を南北に伸びる前線が発生して、１日から２日にかけて県内では１００～２００ｍｍの大雨が降った。このため、更に雨による被害を大きくした。

◎　洪水の体験談　（金田地区の方々）

金旭中の土手がよく切れた。「荒田」と呼ばれた。

台風が接近すれば、集落の人たちは金目川の見回りに出かけた。

大雨が降れば、集落総出で金目川の土手を見に行き、時には、しいの木の枝を切り、「ナガシ」として土手の削れるのを防ぎ、堤防を守った。

飯島は金目川が切れても被害は及ばなかった。しかし、大雨が降ると総員で金目川の水を見に出た。

半鐘がなる。警戒の時には「ミツバン」が打たれ、堤防が切れそうなときには「連打」される。金目川の水が増え、年に一、二回は警戒に当たった。時には、褌を巻き、蓑笠つけて流れに入り「ナガシ」を押さえにかかった。男達が総出で当たり、家には女・子供だけ、子供たちは半鐘がなると、怖さに震えていた。

作業は、急遽「ナガシ」を作り、丸太、のこぎり、かけやを持ち寄り、２・３人で「マワシブチ」で丸太を打つ。針金、縄をよじって押さえる。金目川は川底が高く、決壊すると被害は大きくなる。

飯島は名の通り「島」で洪水被害はなかった。金目川の上流での決壊は、片岡と分ける「控え土手」があり、洪水から守られていた。上流が決壊したときの水の流れは、「控え土手」の外側を流れ、岡崎境を回り、鈴川の土手に沿って下へと流れた。

寺田縄の東橋付近の排水路は、水が出易く、溢水もする。時には、日枝神社に避難することもあった。流れを暗渠にして、１ｍ管を埋設してあるが、その太さは鈴川まで延長されておらず、下流部が狭くなっている。大雨のときの排水能力が低く心配だ。

寺田縄の北部は遊水池的なところであり、水がつきやすい。

悪いけれども、金目川の上流が切れるときは、下流の金田には影響が少なく、助かった。こんなことを言ってはいけないのだが、金目川の上流が切れると、水量が減り安心した。

昭和１３年には、金目川の「御所堤」（金目）と「オオマガリ」（金田）ママが同時に切れた。

寺田縄に住んでいたが、鈴川の北側から高さ５０ｃｍぐらいの水が、波のように丸まってきた。子供時分だったので、たらいに乗って遊んだが流されてしまった。あの時はすごかった。駐在さんの前は、子供では背が立たないくらい深くなった。

川の水が一杯になり、金目川と鈴川が切れ、飯島を除いた集落に水が溜り、特に長瀬には水が集まった。金目川の水の流れはものすごく早く、人が歩くより早かった。荷車も流され、まるで津波のようだった。場所によっては床下浸水もあったが、ほとんどの家が床上浸水となった。

長瀬地域は、金目川と鈴川の三角地帯であり、当時は排水ポンプの設置がなく、水の逃げ道がなく、排水されず、汚水が溜まってしまった。昭和１３年の洪水の時には、池のようになっていたところもある。

金目川が切れ、水は東に流れ、別北の満願寺付近に至り、鈴川の右岸も切れ寺田縄に流れ込んだ。寺田縄の東では、深さは障子の三段目位まで、中には、たらいで遊ぶ子供もいた。金田地区は四日

間ぐらい水につかり、噂話では、長瀬の小川医院付近の土手を切り鈴川に流した。そのためか、水の引きが良かった。

川崎町の低いところには、風呂桶が流れた。

牛を色氏橋の欄干に繋いだ。

入野には、水がじわじわと来た。水がどこまで来るか不安だった。

洪水後の復旧が遅れ、バス停が変更されて、決壊区間をはさんで折り返した。この状態が半年間くらい続いた。入野は、バスの迂回路となった。

伊勢原道は船で行き来した。

土手が切れるのは、水が増える時ではなく引く時だった。お前のところが切れるから、畳をもってこい（堤防を守るために流れに入れる。）と頑強にいう人、もう遅いやと言う人がいたりした。

水が引いた後、家の中のヘドロをかき出すのが、大変だった。

洪水後は、村中で土手や田畑の復旧に当たるが、釣りにくる者がいて頭にきた覚えがある。

洪水後、米の収量は、１反で４俵ほどしか収穫できず、被害が大きかった。

入野の八坂神社の屋根と金目川は、同じ高さ。

入野の八坂神社、福田寺の屋根と天王道の一本松（水神さん）と、同じ高さ。

洪水で苦労したのでその後、土台を高くし水に備える家が増えた。

＜以上は昭和１３年の洪水とは限らず、金田地区での体験談を記しました。金田地区歴史再発見事業の活動委員会が編集した「私たちの住む町　金田」に収録されています＞

金田地区は、奈良時代に「川相郷」とされていた時があります。金目川と鈴川の２本の河川に挟まれた郷とされていたのでしょう。両河川は水田耕作のために有益でしたが半面、洪水に被害に悩まされ、たびたび河川改修が施されて今日に至っています。